

# みんなの童話

## ぼくの名前は黒べえ



母さんを思い出した。母さんは、

美しい三毛ねごだった。うすべら  
いじめじめしたところで、おっぱ  
いを吸ったのをかすかにおぼえて  
いる。ぼくのほかに兄と妹がいた  
ような気がする。ぼんやりかすん  
だ夢のような記憶だ。

気がついたときには、ぼくのそ  
ばに、だれもいなかった。

ミルクを飲んで少しあったまっ  
たぼくは、しばふの庭をはなれた。  
静かな住宅地だったので、人間  
は、ぼくを見ても「黒ちゃん」と  
か「黒」と呼ぶだけで追いかけた  
りしてこなかった。

ある日、海岸を歩いていると、  
さんぽをしているおじさんにな  
った。おじさんは、ポケットか  
ら何か出して

「これでも食べるか。」  
と、いった。  
ビスケットだった。ぼくに食べ  
物をくれる人はめったにいない。  
(うれしい！)

次の朝も海岸にいつてみた。  
おじさんが、歩いてきた。ぼく  
を見ると、

「黒べえ、こっちへおいで」  
そういつて、ポケットからキャッ  
トフードを出してくれた。  
ぼくは、かんげきした。

ぼくのためにわざわざキャット

フードを、持ってきてくれた。  
それからは、天気の良い日は、  
海岸に出かけるようにしている。  
おじさんは、ぼくを見ると、  
「黒べえ」と呼ぶ。「じゃあ、じゃあ」  
と寄っていく。一時をすごすと、  
おじさんは、かえっていく。  
雨がふると、のらねこは悲しい。

お宮のえんの下とかお寺の階段は  
特等席だ。今では、金網のはって  
あるところもおおい。  
そんな時、かいねこはいいなあ  
と思う。せつかく特等席までいつ  
ても先にボスがいたら、ねこ仲間  
では、ひきさがるのがきました。

そんな時は、木のしげったとこ  
ろをさがして雨宿りする。  
ぼくたちのらねこは、毎日食べ  
物をさがさなければ生きていけな  
い。これは、たいへんなことだ。

生まれたばかりの頃は、おいし  
そうな匂いに、近寄っていた。  
大抵は、おいはらわれたが、  
「黒ちゃん、これお食べ」  
と、魚のはしや肉の残りをだして  
くれる人もいた。食堂のうらとか  
スーパーのごみ置き場をさがして  
いるうちに、顔みしりや友達がで  
きる。そしてねこ仲間の話がはず  
む。今では、どこへ行けば、おい  
しい食べ物があるか、わかるよう  
になってきた。

人間の中には、黒ねこはえんぎ

が悪いと思う人と、えんぎが良い  
と考える人がいる。ぼくには、  
どっちだっていいことだが、人間  
にきらわれないように、くらし  
いくことを心がけている。  
たとえば、ごみ置き場のごみ袋  
をかみ破り、あたり一面ちらかし  
て人間を怒らすようなことは、か  
しいねこのするところではない。

人間のわがままな金魚や小鳥の  
そばにもかしいねこは近寄らな  
い。こういふことは、ねこ仲間  
で話あっているうちに、おしえられ  
てきた。

首輪のないねこが歩いていると  
「のらちゃん、おいで」とか  
「黒い、こちそうおいやうやう」  
などと、声をかけられることもあ  
る。友達に、色々おしえてもらっ  
て、かしいねこになっていく。

のらねこから見れば、かいねこ  
は、くらしにくいもの。  
いつも住むところや食べ物がある。  
もし不足をいうならば、気ままに  
歩きまわれないことだ。

ぼくは、今でも海岸にいく。あ  
のおじさんにあいたいから。でも  
あえない時もある。そんな時、  
ぼくは海を見てもかえる。波の音が  
「黒べえ」と呼んでいるような気  
がする。

しつやま会員 かたやまのぶい